十五年前の思い出

蒲谷　宏

辻村先生には、私が第一文学部の三年生の時以来十五年間にわたり、ご指導を仰いできたことになる。

当時は三年生から専門課程に入ったのだが、私は先生の「国文法」のご講義を受けることを大変楽しみにしていた。その国文法の最初の時間に、早速先生のお人柄を垣間見ることがあった。

確か形容詞の活用か何かについて、ある女子学生を指名して質問されたのだが、その学生が答えに窮したときに、おそらく簡単な確認か何かのおつもりだったようで、むしろ先生のほうが申し訳ないというようなお顔になり、「別に困らせるために指名したわけじゃないんだけど……」とおっしゃっていたことが強く印象に残っている。

辻村先生が大変優しい先生でいらっしゃることは教え子のだれもが感じることかと思う。が同時に、研究指導においては非常に厳しい面もおもちであった。特にこちらが見落としてしまうような細かい点にまで神経を行き届かせるご指導であった。しかしそれは、細部を

ゆるがせにしない研究態度を学生に身につけさせようとされていたからであって、むしろ本質的なことをより一層重視されていたのだと私は思っている。それは研究の面だけでなく、大学の行政や学会の運営上の問題などについてもそうであったと思う。

三年生の秋、卒業論文執筆に関する最初の面接の時、私が吉利支丹資料の「こんてむつすむんち」を用いて書きたい旨をお伝えすると、先生は「そういう資料を扱うと、原本を見にボドレアン図書館にでも行きたくなるんじゃないの」と笑顔でおっしゃったが、修士論文で引き続きその資料を扱った際にも、それは叶わなかった。十五年という月日が流れた現在、早稲田大学の在外研究員としてオックスフォード大学に来ているが、そのボドレアン図書館で「コンテムツスムンチ」ローマ字本の原本を見る機会に恵まれたときには、先生のお言葉や当時のことを思い出し、さすがに感慨も一入であった。

今では吉利支丹資料そのものからは離れ、遅れ馳せながら先生のご専門の分野である「待遇表現」の研究・教育にも携わるようになった。頼りない研究生活を送ってきた不肖の弟子の自主性を尊重され、温かく見守ってくださった先生のご恩に報いるためには、ただ単に先生の学説を継承するということではなく、先生が大切にされてきた、物事の本質を見極める姿勢を持つことをこそ受け継いでいきたいと思っている。